

青年国際交流事業の効果検証に関する検討会（第2回）議事要旨

1 日 時：平成27年6月11日（木）10:00～12:00

2 場 所：中央合同庁舎第8号館共用C会議室

3 出席者：

（委員）牟田座長、池上委員、井上委員、竹尾委員、源委員

（内閣府）矢作内閣府青年国際交流担当室参事官

大部参事官補佐（青年国際交流担当）

（ヒアリング聴取者）

平成26年度グローバルユースリーダー育成事業研修講師 榎本英剛氏

（オブザーバー）

日本青年国際交流機構副会長 大橋玲子氏

4 概要：

（1）開会

（2）平成26年度グローバルユースリーダー育成事業

研修講師からのヒアリング（主な発言）

- ・ 陸上研修から帰国後研修まで約1カ月間参加し、多くの国の人たちと密度の濃い時間を過ごすこと自体が参加青年にとって非常に大きな価値がある。
- ・ プログラムに参加する目的意識について、総体的に外国参加青年に比して日本参加青年のほうが曖昧な印象。それは必ずしも悪いことではない。基本的には自分で選んで参加している前向きな人たちなので、かなりレベルの高い外国青年に取り囲まれて目的意識のギャップに直面しても、一時的なショックは受けるが、立ち直って、目指すべき像、個人レベルのベンチマーキングができ上がり、それに向けて頑張っていこうという意欲につながっている。
- ・ 参加青年は個人差があるが、大きく4つのフェーズを経ていく。陸上研修（期待と不安が入りまじった状態）、船上研修（カルチャーショック状態）、船上研修（開き直りの状態）、海外研修（地に足がついた状態）。から、あるいはからヘスムースに移行できるよう、サポートが必要。
- ・ 日本参加青年の陸上研修前から船上研修後における各能力の伸び率が顕著に伸びている理由として、1. 様々な外国参加青年たちと交流することで、世界のスタンダードの中で自分というのは一体どういう強みがあって、どういう課題があり、どれぐらいのレベルなのか、ということについての自己認識（内的認識）の高まり。2. プログラムの中で寄港地活動があったり、外国参加青年からその国の文化のことを聞いたりする中で、今まで知らなかったことに触れ、自分が今生きている社会、世界がどうなっているかという社会認識（外的認識）の高まり。上記2つの認識が高まることは、参加青年の継続的な成長には欠かせない要素で

あり、この高まりを実質的な成長につなげるためには、本人たちの自己評価だけでなく、他者評価や、あるいは継続的なフォローアップができるかにかかってくるのでは。

- 青年の実際の成長のためには、個別のアドバイスを含めた参加青年へのフィードバックが必要なのではないか。フィードバックを行うにしても、スタッフに限りがあるので、補完的にピアフィードバック（青年たち同士によるフィードバック）を取り入れてみてはどうか。
- 本プログラムは忙しい。学んでいることを統合する時間があまりない。次回に向けては、日々学んでいることを統合して、翌日からそれをどう生かしていくかというサイクルを導入することで、より実質的な成長を高めていくことはできるのではないか。
- リーダーシップを高めることを考えると、自発的、自主的に何かをする機会を多く提供したほうがいいのでは。プログラムレベル、日々の生活レベル問わず、もっと青年たちに任せていくことがあってよいのでは。
- 参加青年の広報とリクルートについて、より多様性のある、より目的意識をはっきり持ってプログラムに参加するために、事前研修などで工夫する余地があるのでは。
- 自分は何ができて何ができないのか、今週はどこまでできて、次は何にチャレンジしたいのかを個人別に整理するような時間を持ち、意図を持って学習に臨むことができれば、開き直りの状態から地に足のついた実践状態につながっていく。
- 事業参加後1年経ってみて、どれくらいプログラムの中で自分が学んだことが、日々の仕事や、生活の中で活かされているかについて、お互いに振り返りをしたり、学習の機会などを提供していくこともあるかもしれない。
- プログラムデザインの意思統一について、様々な人が関わっているので、それぞれがどういう意図で、どういうことをやろうとしているのか共有した方がよい。
- 個人差がある中での到達目標について、提供側として、プログラムの意図を伝えることは必要。また、参加青年は、自分なりの意図をもつことで、個々人の自発的な成長目標などを持つことができるのでは。
- お互いの成長を見守って応援するようなチームをつくり、お互いにどうだったというようなフィードバックを与え、振り返りをする時間、プランニングの時間を週に1時間程度設定する。その程度の時間がとれれば、自分の自己満足的なものではなく、仲間のピアの視点も入れた振り返りというレベルであれば、PDCAのサイクルを週単位で回すことは可能ではないか。
- その場でフィードバックすることが、一番学習効果が高い。また、フィードバックは、フィードバックされる相手にとって意味があると同時に、するほうも自分の学習の整理にもなる。

- ・ 個別のフィードバックに関しては、筆記方式よりは、コミュニケーションを通して行うことが効果的。
- ・ フィードバックは事実ではなく、フィードバックした本人がそう思ったという点において評価とは異なる。フィードバックをするにも技術を要するが、フィードバックを受ける方にも、正しいフィードバックの受け方というのがあるので、フィードバック教育は必要。
- ・ 外国参加青年について、発言や行動を起こしていくという部分のリーダーシップは日本参加青年に比べて、もともと外国参加青年のほうが高いが、今、世界で求められているリーダーシップで考えると、他人の話に傾聴したり、周りの状況を見て判断するといった部分については日本参加青年の方が高いのではないか。それぞれの課題が違う分、プログラムデザインするときに、どこに焦点を当ててプログラムデザインするかが課題。

(3) 事務局説明

- ・ 第1回検討会における各委員からの御指摘、御意見に対する回答について、配布資料に基づき、事務局より説明。

(4) 意見交換(主な発言)

- ・ 27年度は、海外研修はなく、船上研修が34日になり、その中でどう変化したか、質問の仕方とか分け方を洗練させるということができないか。
- ・ 評価については、常に右肩上がりであることに越したことはないが、目標値を設定し、達成することをもって質の高い研修ができたとしてもよいのでは。
- ・ 各能力の伸びを初期の自己評価別に分析することで、なにかみえてくるものがあるのでは。
- ・ 自信などをつけていく過程で何が起きているのかをとらえるために、ピアフィードバックをもし使うとすると、結構定性的な情報になってしまう。定量化することで、例えば異文化適応能力が向上したといった分析ができないか。
- ・ フェーズごとに、例えば1週間の間に何を学んで、何が変わったかということのを非常に簡単に記述すると同時に、評点をつける。それを全員で紙1枚に書いてもらって、それをフェーズごとにやる。それを集計すれば定量化し、分析できるのでは。
- ・ 多くの若者が問題解決、課題解決ができないという現実があり、国の事業として、擬似体験的に自信をつけさせるような細かな課題設定をしていく必要があるのでは。
- ・ 国の事業であるからには、どこを伸ばしていくか、どこに焦点を当ててプログラムをつくって、本当に伸びたかということも検証していく必要があるのではないか。

- ・ 27年度は、プログラムの意図や内容が変わってくるわけで、評価項目について従来のものと全部同じ必要はなく、資料3で示されたように、ほとんど関係しているということであれば、質問の取捨選択ができるのではないか。
- ・ アンケートについては、受ける側が疲れないう簡略化し、必要な情報がとれるものとし、受ける側が納得をするような説明も必要。これで回答率が随分違う。また、参加するときに、ずっとフォローアップとしてアンケートをすることを織り込み済みで、約束をさせてはどうか。

(5) 閉会

- ・ 次回、第3回検討会は、6月18日(木)開催予定。
- ・ 第3回検討会ではこれまでの意見の取りまとめ案を提示予定。

以上